

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25870433

研究課題名(和文) 認知症ケアの臨床・歴史社会学とケア概念の再構成

研究課題名(英文) Clinical and Historical Sociology of Care for Individuals with Dementia and Re-Conceptualization of Care

研究代表者

井口 高志 (Iguchi, Takashi)

奈良女子大学・生活環境科学系・准教授

研究者番号：40432025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、2000年代以降の新しい認知症ケア概念の特徴を、複数の質的データに基づいて明らかにする作業と、ケアを超えて展開する認知症をめぐる活動についての探索的検討を行った。第一に、認知症関連の複数のドキュメンタリー番組の視聴と文字の書き起こしから得たデータをもとに、過去の認知症の人へのケア実践と現在のものとの異同を明らかにし、現在の認知症ケア実践に対する示唆を示した。第二に、フィールドワークをもとに、認知症の本人を重視した現代的なケアに置けるジレンマを明らかにした。第三に、ケアや介護の課題を超えて展開する当事者活動の持つ可能性と予想される困難について検討し、今後取り組むべき課題を明確にした。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the characteristics of the new conceptualization of dementia care emerging from the 2000s on the basis of multiple qualitative data and explored certain activities related to dementia that move beyond caregiving issues. First, based on text data obtained from viewing multiple documentary programs related to dementia, I revealed the differences and similarities between common care practices for people with dementia in the past and current practice and presented suggestions for improvements to current dementia care practice. Second, based on fieldwork, I revealed a dilemma in advanced person-centered care for people with dementia. Third, I examined the possibilities and anticipated difficulties of developing activities involving those with dementia beyond caregiving and medical issues and clarified issues to be addressed in the future.

研究分野：社会学

キーワード：認知症 ケア 当事者

1. 研究開始当初の背景

日本におけるケアの社会学的研究において、2000年代後半から「見守り」と言われるケアの要素に注目が集まってきた(寺本他編 2008『よい支援?』生活書院など)。「見守り」概念は、ケアされる者とする者との二者関係の中での具体的な介助という行為水準で捉えることが難しく「一緒にいること」「場所を作ること」などで表現される内容を指している。

こうした「見守り」の重要性が顕著に現れてくる領域の一つが、「行動障害」や認知機能の低下に伴う生活上の不便などの支援が中心になる認知症ケアである。これまで家族を中心とした介護者から、認知症の人のケアにおける「見守り」の存在とそれに伴う困難は指摘されてきていた。しかしながら「寝たきり」や身体的介助を中心とした介護の概念化の中で、その内容やニーズへの注目は遅れてきた。他方で、2000年代以降、認知症の本人の「思い」に注目した新しいケアの考え方が社会的に強調されていく中で、それ以前から草の根的になされてきていた、介護する側ではなく認知症の本人に寄り添い、地域の中に「居場所」を作る実践に注目が集り、いわば「見守り」的な部分を中核にした認知症ケアや高齢者介護全体の編成が目標とされるようになっていった。

以上のような政策や実践を反映して、介護や社会福祉領域における研究では実践的な関心に基づき「見守り」的なケアの測定や、「居場所」を作る実践の事例紹介がなされてきていた。しかし、それら他分野の報告・研究では、「見守り」概念の経験的データに基づく精緻化が十分ではない状況であった。また、「見守り」という行為領域に関しては、認知症ケア領域とは別の、例えば、知的障害者の地域支援などでも課題となっており、認知症ケアとの類似性も指摘されている(寺本他編 2008)。しかし、ケア概念が社会的、社会科学的に汎用的に使われるようになってきた一方、領域横断的に類似性や差異を検討する考察はそれほど進んでいないのが開始当初の状況であった。

2. 研究の目的

1で提示した経験的データに基づく精緻化と他領域との比較に基づく横断的検討という課題を踏まえて、本研究の第一の目的は「見守り」を中心とした認知症ケアの概念を彫琢し、認知症ケア研究を進展させていくことである。

経験的データに基づく精緻化として、これまで申請者が行ってきた研究で得た認知症に関する文書・映像データのテキストをもう一度整理・分析し、時代や実践の文脈におけ

るケアや「見守り」行為のあり様に関する比較検討を行う。以上を出発点としながら、認知症ケアが行われていたり、ケアを行っている人が集ったりしている場でのフィールドワークを行って「見守り」や「居場所づくり」のあり様を、これまでの自身の研究で行ってきたフィールドの分析の知見と対照させることでより明確にしていく。

以上のような認知症ケア領域での経験的検討を、他領域の研究とつなげていくことが二つ目の目的である。筆者は他研究者と連携して2011年3月に『支援』という雑誌を創刊した。その雑誌は知的障害や発達障害の地域支援について研究をする研究者、実践者も寄稿する形のものであり、他領域の研究における「見守り」の分析と対比が可能な媒体である。この媒体は一例であるが、領域横断的な考察においては、申請者本人が障害などの領域の資料を蓄積し、関連付けていく作業を行うことはもちろん、他領域の研究者や実践者が生み出す成果との間で相互参照する中で、知見を深め、ケアの概念化を行っていく作業が重要である。すなわち、ケアを社会的に論じる議論の空間の創成を試みるのである。

3. 研究の方法

本研究の方法的な柱はフィールドワーク(参与観察、インタビュー)に基づく考察と認知症ケアの現代史の把握のための資料の探索・整理・分析の二つである。

まずは、以前の研究の中で収集・作成してきた認知症ケアの歴史を明らかにするためのデータ(主に文書、映像の逐語録など)を整理しながら、それらから把握できるケア実践を比較検討することから始め、徐々にフィールドワークの比重を増やしていく。また現代史的なデータの追加収集・分析として、NHKアーカイブスの閲覧を再度申請するとともに、文書資料の収集・整理も継続する。

「見守り」の内実把握の中核的作業となるフィールドワークを、それ以前から関係を形成してきた若年性認知症の支援を主に行いつつ、新たな場を作っていこうとしているフィールドを中心に行う。だが、認知症をめぐるは新たな支援の試みなどが増えてきており内容も流動的なので、適宜、比較に適したフィールドを見つけながら継続的に行って、データを蓄積し分析していく。

さらに、以上のように、データ分析をした後、障害など他領域におけるケアとの領域横断的な検討を、多様なケア領域の研究者が揃う研究会や媒体で報告しながら行っていく予定である。

4. 研究成果

本研究の成果は、第一に、本研究課題開始以前から収集してきたNHKの認知症関連番組の詳細なテキストデータを基に認知症ケア概念の特徴や変遷を再分析して、国際学会等

で報告したことである。研究成果の、
がそうした業績になる。2000年代以降に認知症関連の番組は増大し、それらの番組の中では本人の「思い」が焦点を当てられたり、認知症の人たちに対するパーソンセンタードケアなどの新しいケアのあり方が紹介されたりしている。そうしたデータからは一見本人の「思い」の重視や「その人らしさ」へのよりそいといった、従来の介護行為とは異なるケアのあり方はそれ以前の認知症ケアにおいては不在であったかのように映る。しかし、1980年代からの認知症(痴ほう、呆け)関連の番組においても、本人の「思い」への注目や、よりそうケアのようなものは、先駆的なケア実践をとりあげた番組の中に見ることができた。ただし、そこにおける「思い」には、現在注目されている「思い」とは異なる意味づけを与えられているなど、差異ももちろん見られる。また、本人の「思い」がケア現場の置かれた環境や文脈の中で、現場に葛藤をもたらすさまなども見えてくる。このような認知症ケアや認知症の人の表象における、現在との異同を、映像データの分析によって歴史的に明らかにすることを通じて、現在のケア実践の中にも潜在的に含まれるいくつかのケアのあり方のバリエーションや、生じうる課題を見出すことができた。本来であれば、国際学会での報告から他国との比較などへの展開に至ることができればよかったが、それは本研究以降の課題である。

第二に、「見守り」などの新しい認知症ケアの概念の彫琢という目的に関わる成果が挙げられる。当初目的に設定したような複数のフィールドにおける精緻な経験的な研究は、実際には達成できなかったが、以前からフィールドワークを続けてきたいくつかのサイトにおけるケア実践について分析し、理論的にまとめた論文や文章を数本発表することができた(①②⑩⑭⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔)。特に若年性認知症の人や家族に対する支援において、「できること」を可能にするような場を設けるといったことが支援実践としてなされてきているが、そうした試みの意義と現場で生じる葛藤について明らかにしていった。また、その作業の派生的な成果として、認知症ケアを対象とした社会学や社会調査のあり方に関して考察する研究報告や論文発表を行った()。

第三に、第二の成果を踏まえて、ケアする側とされる側を前提としてケアや支援を超えるような実践や活動の探求に乗り出し、いくつかの試論的な論文や報告を発表することができた。は障害者の領域におけるアートや農業とコラボレーションのもとで生まれている実践報告を中心としたシンポジウムをまとめた論文であり、認知症領域におけるまちづくりや農業との連携などの新しい居場所づくりの動きを考える際の参照となる事例である。また、は、知的障害者への福祉の研究者や、当事者たちとの共同研究

であり、当事者参加型のリサーチがいかにして可能かを検討したものである。こうしたプロジェクトから認知症の人が参加したリサーチのあり方を考えていくことが次なる課題として見出された。このように、他領域に広がる形で、またケアに留まらない認知症をめぐる活動に焦点を移していくような形で、研究が展開していき、認知症に関する研究としては、当事者の活動に焦点を当てた⑪や⑳などの成果を発表することもできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

井口高志、認知症の人の『思い』と支援実践：語りと現実との関係から問い直す臨床社会学、N:ナラティブとケア(遠見書房)6、62-68、2015 査読無し

井口高志、「できること」の場を広げる：若年認知症と折り合いをつける実践の展開が示唆するもの、現代思想(特集 認知症新時代)43(6)153-169、2015 査読無し

井口高志、研究倫理実践の社会学・試論：認知症デイサービス調査における『同意』獲得過程から、奈良女子大学社会学論集、23号、21-37、2016 査読無し

井口高志、森川美絵、特集「領域横断性：創造的活動との接点から福祉社会を考える」に寄せて、福祉社会学研究、14、27-35、2017 査読無し

森口弘美・井口高志・太田啓子・松本理沙、調査活動「みんなが行きたくなくなるカフェってどんなカフェ?」：インクルーシブリサーチの観点からの検討、評論・社会科学、123、83-99、2017 査読無し

井口高志・森口弘美・太田啓子・阪東俊忠、障害者と大学生との協働ワークショップが家庭科教育に提起するもの、教育システム研究、13、295-307、2018 査読無し

[学会発表](計6件)

Iguchi Takashi, Akiko Tajima, How have people with dementia been represented in TV documentary programs in Japan? (1), The 28th International Conference of Alzheimer's disease International, 2013/04, in Taipei (Poster Presentation).

Iguchi Takashi, Akiko Tajima, How have people with dementia been represented in TV documentary programs in Japan? (2), The 20th IAGG (International Association of

Gerontology and Geriatrics) world congress of gerontology and geriatrics, 2013/6, in Seoul (Poster Presentation).

井口高志、認知症ケアの社会学の構築と再考：どのように研究を展開してきた/いくか、第16回奈良女子大学社会学研究会、2014年4月、奈良女子大学、奈良

Iguchi Takashi, How New Is the Image of Those with Dementia in 21st Century in Japan? :an Analysis of TV Documentary Programs in the NHK Data Archives, ISA (International Sociological Association) world congress, WG03 Visual Sociology, Visual Images and Arts in Ageing Research, 2014/7, in Yokohama.

井口高志、認知症の「本人」の登場はいかになされ、何をもちたすのか?、第70回日本社会学会大会、2016年10月、九州大学、福岡

井口高志、認知症ケアにおける家族と生活の質、第9回福祉社会科学講座、2017年3月、大分大学、大分

〔図書〕(計4件)

井口高志、「症状」探しという症状、認定NPO 法人健康と病いの語りディベックスジャパン編『認知症の語り：本人と家族による200のエピソード』日本看護協会出版会、288-290、2016

井口高志、「家族介護者になる」という経験について、認定NPO 法人健康と病いの語りディベックスジャパン編『認知症の語り：本人と家族による200のエピソード』日本看護協会出版会、423-425、2016

井口高志、介護生活と震災：インフォーマルな資源と住まいの選択に注目して、土屋葉・岩永理恵・井口高志・田宮遊子『被災経験の聴き取りから考える：東日本大震災後の日常生活と公的支援』生活書院、67-87、2018

井口高志、単身生活する高齢女性たち：被災後を支える社会関係とその微細な変容、土屋葉・岩永理恵・井口高志・田宮遊子『被災経験の聴き取りから考える：東日本大震災後の日常生活と公的支援』生活書院、171-187、2018

〔その他〕

井口高志、「新しい認知症ケア」の時代と労働・仕事・活動：認知症ケアの現在地点とその先、Synodos (http://synodos.jp/welfare/6521) 2013

井口高志、「みんなの問題」について考え

る、「支援」編集委員会編『支援 vol.4』(生活書院) 166-168、2014

井口高志、ブックレビュー『異文化』での老いることの記述に私たちは何を見るか?：高橋絵里香著『老いを歩む人びと：高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』、「支援」編集委員会編『支援 vol.4』(生活書院) 324-326、2014

井口高志、「区切らない」試みとしての認知症ケア、『月刊福祉』97(10) 56-57、2014

②井口高志、書評 自尊心を守るケア労働の可能な条件を探る：岡京子『ユニットケアとケアワーク ケアの小規模化と「ながら遂行型労働」』(生活書院) 図書新聞、3258、2016

②井口高志、論文の執筆と投稿に関する講演とラウンドテーブルディスカッション(2016年3月5日)実施報告、保健医療社会学論集、27(1) 142-144、2016

③澁谷智子・松崎実穂・井口高志、ケアする子どもと若者たち：ケアを担うということ、そして将来への不安(トークセッション)、「支援」編集委員会編『支援 vol.7』(生活書院) 155-187、2017

④井口高志、認知症ケアにおける生活の質：あるデイサービスの本人の「思い」の聞き取り実践を事例に考える(資料)福祉社会科学(大分大学大学院福祉社会科学研究科)9、61-76、2017

⑤井口高志、コラム5 個々の自由記述データをどう生かすか?、土屋葉・岩永理恵・井口高志・田宮遊子『被災経験の聴き取りから考える：東日本大震災後の日常生活と公的支援』生活書院、233-237、2018

⑥樋口直美・井口高志、幻視は“まぼろし”ではない、「支援」編集委員会編『支援 vol.8』(生活書院) 114-131、2018

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井口 高志 (Iguchi, Takashi)
奈良女子大学・生活環境科学系・准教授
研究者番号：40432025